ウィルあいち交流ネット通信

(公財)あいち男女共同参画財団

第81号
2015.2.

「今、男女共同参画に思うこと」

今、安倍首相は女性の活躍を重点政策に掲げていますが仕事と家事・育児・介護の両立に四苦八苦している女性が多いように思われます。 以前から疑問に思っていたのが、福祉大国スウェーデンの女性たちはどのような環境の中で両立しているのかということです。調べてみました。

16歳未満の子どもには一定額の児童手当が支給され、第2子以降は額が加算されます。1歳を過ぎれば保育所に入れます。公立・民間・教会、預ける時間もさまざまでライフスタイルに合った所を選択できます。教育プロセスは日本の教育システムとほぼ同様ですが、成人教育については多種多様な学びの場が用意されていて、最長4年の教育休職制度もあります。

仕事の面でも多種多様な労働時間を男女とも選択でき、日本の男性のように長時間労働を強いられる事もないので、女性と同等程度に家事・育児・介護に携わる事も可能です。また人材の最適配置を一企業内で行うのではなく、社会全体で行い、企業の枠を超えてキャリアが蓄積され記録されます。つまり係長になれば転職しても係長のまま復帰できるということです。性別や年齢にかかわらず全ての人が「学び、成長し、働き続ける」ということを前提に自分のライフスタイルに合った働き方を多くの選択肢の中から選択できるのです。そして、「支え、支えられる」という仕組みを持っていて、就労によって社会を支えると同時に、育児サービスを受けたり、スキルや知識を習得するために教育費用や休暇をもらうこともできます。そしてお互いを尊重し協調していく社会を作ることをめざしているのです。

昨年末でしたか、「サイボウズ」というソフトウェア開発会社のCMが話題になりました。働くママの所に「子どもが熱を出した」とメールが届き、当然のようにママが迎えに行く。子どもを抱いて歩きながらふと立ち止まり、「私だって責任ある仕事を任されているのに……明日どうしよう……」と思っているような途方にくれるママの表情。そして「大丈夫」とつぶやいて自分を勇気付け、不安ながらもまた歩き出す。ほぼ専業主婦の私でも、ママの泣き出したいような気持ち、どうしようもない現実を察すると涙が出そうでした。これが、今の日本の女性の姿そのものではないでしょうか。「サイボウズ」のCMは「働くママたちによりそうこと。」という言葉で終わっています。こういう女性にやさしい企業がどんどん増えることを願っています。そして、税金が倍になっても仕方ありません。女性が安心して働くことのできる支援・社会構造を構築する事を望みます。それにはやはり政財界への女性進出が不可欠でしょうか。ある意味「男」にならなければ活躍できませんでした。女性が女性の特性や視点を活かし、女性のままで活躍できる世の中であればこんな私でもお役に立てることがあるように思います。私達の孫が結婚する頃、「お母さんたちの時代は大変だったんだね！」と笑って言える社会になっているように、安倍首相！よろしくお願いします。私もできるところでがんばります。　　Amelie10　加藤 智子

ウィルあいち交流ネット参加グループ

*さわらび会
*メンズリブ名古屋
*ア・コール
*女性学”98の会
*ＩＰＡ
*メディアの会かたつむり
*ウィル１０
*Ａ・Ｂ・Ｃ-Ｎｅｔ
*Ｃ・Ｃ・Ｃ
*グループ・キートス
*クラリネット”９９
*２０００女性学の会
*ウィル２０００
*Ｉ．Ｗ．Ｌ
*ウィル・ミニ・ボックス
*ウィルＤｏ2002
*平成いちご会
*きらら2005
*サーティネット‘０５
*ベリーズ18
*Ｓｔｅｐ０７
*トライアングル‘０８
*まちづくりファシリテーター勉強会
*Fem.'０９
*Amelie’10
*なでしこAICHI
*きらり24

（設立順）

ウィルあいち交流ネットとは…

ウィルあいちセミナー等の受講修了生による自主活動グループで組織された団体です。

男女共同参画　全国の現場から（8）　つくばにて　その2

この秋再びつくばで行われた、草の根の集まりで学んだ話をご紹介したい。

できそうにもないことを思いつくのは簡単だが、実際にやるのは至難だ。そんな中、軽やかに諸事情の壁を飛び越えて突き進んでしまう人には、どうも男性よりも女性が多いのではないかと感じる（筆者比）。

バブル真っ盛りの1989年。つくば市に引っ越してきた40代半ばの主婦が、近所に静かなため池を囲む緑豊かな里山を見つけた。お気に入りの散歩コースにしていたら、そこにも団地だのゴルフ場だの、いろいろな開発計画が持ち上がってきていることを耳にした。皆さんならどうするだろうか。何ができるだろうか。

その里山は、当時開発に拍車のかかっていた筑波研究学園都市の中心部から、5キロメートルほどしか離れていない。西は常磐高速道、東は国道6号線、北は土浦駅とつくばを結ぶメインの道路に囲まれ、道路交通は至便。そこに谷地田（低い丘陵の間の谷間に細長く伸びる田んぼ）と、薪を使わなくなった現代人には無用の雑木林が、個人地権者70名ほど（現在では300名ほど）の所有する民有地として、奇跡的にも100ヘクタール（1×1キロメートル四方）ほどの規模で残っていた。

しかしそもそも他人さまの土地。しかも自分は隣町に越してきたばかりの一主婦。にもかかわらず、彼女は、この生物相豊かな里山を何とか守れないかと、自ら行動を始めた。関心を同じくする人たちや話を聞いてくれる地権者に働きかけ、つくば市の政府系研究機関に勤務していた生態系保全の専門家の男性を会長にして、任意団体「宍塚の自然と歴史の会」を設立。まだNPOという組織形態がなく、女性が会長になることも考えにくい時代だった。

しかしその6年後、初代会長の転勤で、彼女自身が会長となることに。14年後には、NPO法成立を受けて特定非営利活動法人に改組。現在では、活動を金銭面などでサポートする会員600名以上（多数の企業会員を含む）、年間を通じて行われる各種イベントや保全活動に協力する実働部隊100名以上、という規模に成長している。

活動は多岐にわたる。里山の生物を観察・記録する。人の手が入らなくなって日当たりが悪くなった雑木林を、下草刈りや枝打ちで明るい森に戻す。休耕田になっていた谷地田を借りて耕作する。池や山に増えてきた外来種を駆除する。これらを、住民のボランティアに加え、近隣の小中学校の授業や大学のゼミ活動、企業の職員研修の場にしてもらうことでマンパワーを補って、多年続けているのだ。毎月1万5千部発行する会報は、土浦市とつくば市の小中学生全員に配布される。年間予算はわずか6百万円。同じ規模の自然公園を市が運営した場合の、100分の1以下ではないか。これまでにいただいた各種の賞は数知れず。ユネスコの「未来遺産」にも登録されている。

この奇跡のような活動を創り出し、今日まで続けてきた彼女も、70歳になった。内心は断固としていて、しかし外側はどこまで柔和な彼女のリーダーシップのもと、無数の人たちが思い思いに手をつないで動いている。NPOの理事には最近、34歳の若者も加わった。彼女の産んだ活動は、着実に次の世代へと受け継がれ、続いていく。

内閣府男女共同参画局　共同参画より
地域エコノミスト・（株）日本総合研究所主席研究員　藻谷 浩介

［編集後記］ 毎日、寒い日が続きます。インフルエンザが流行っているそうです。気を付けてください。　S.i

編集発行：ウィルあいち交流ネット
編集協力：(公財)あいち男女共同参画財団